

知財の要塞：ソフトバンクグループ 「特許大量出願」の全貌

2025年12月の異常値が示唆する、生成AI時代の新たな知財戦略

10,400
件

**2025年
出願公開件数 第1位**

(前年比約19倍)

82,188
件

**2025年12月
日本全国特許出願数**

(前年同月比2.7倍の歴史的異常値)

0.5%未満

**2025年
特許取得率**

(公開10,400件に対し取得わずか55件)

【結論】 ソフトバンクグループによる「3つの波」にわたる絨毯爆撃的な特許出願は、生成AIを活用した前代未聞の「知財の要塞」構築プロセスである。

2025年12月、日本の特許統計に現れた「巨大なスパイク」



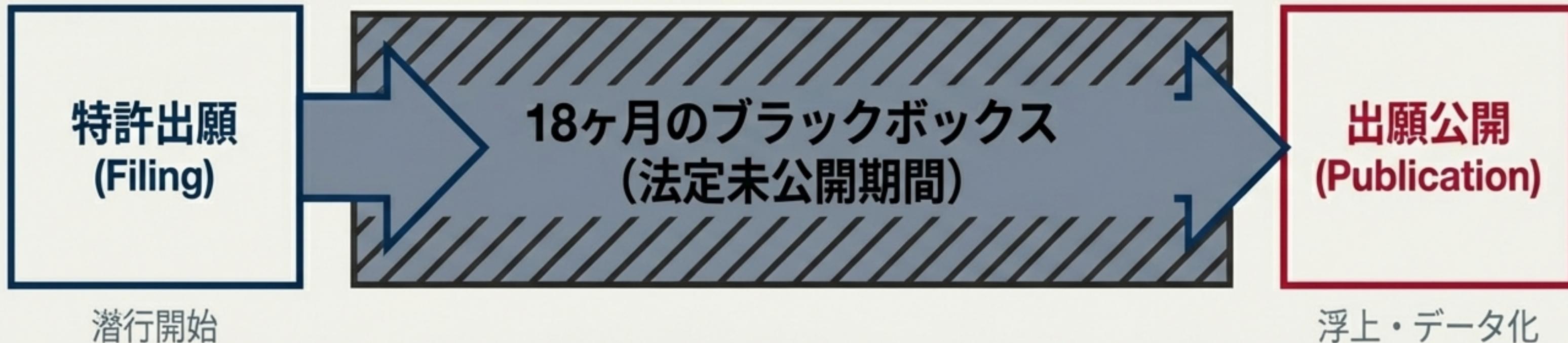
異常値のスケール

- 2025年12月単月の出願数は82,188件。
- 例年（約3万件）および前年同月比で168.9%増（約2.7倍）。
- 過去10年間に類を見ない国家統計レベルのアノマリー。

“

業界内で強く囁かれる仮説：「特定企業による、生成AIを使用した大量出願の第3波」

なぜ「推測」なのか？：特許制度に潜む「18ヶ月のブラックボックス」



現在地 (2026年初頭)

我々が現在特許庁のデータとして観測できているのは、18ヶ月前の「2024年中盤」に行われた過去の動きに過ぎない。

ブラインドスポット

2025年12月の異常出願の正体が公報として確定し、完全に証明されるのは「2027年中頃」となる。そのため、過去のパターンからの演繹的推論が必要となる。

確認された過去の波：第1波（2023年）と第2波（2024年）

第1波（The Confirmed Intent）



「生成AIコンテストで10万件のアイデア。そこから1万件を選抜して出願した」 — 孫正義会長（SoftBank World 2023）

第2波（The Anonymous Whale）



特許庁報告：「AI関連のかなり大きな特定企業による大量出願があった」。2026年1～2月時点でSBGの公開件数は既に7,486件に到達。

状況証拠が指し示す「第3波」の正体

1. 異常な公開ペース

2026年1~3月時点で、SBGの出願公開件数は既に11,964件。前年通年(10,400件)をたった3ヶ月で超過し、第2波の公開ラッシュが加速中。

2. 現場からのリーク

2025年12月のSBG周辺情報として、「1ヶ月で7,780件の特許を出願した」という記録が指摘されている。

結論：2025年12月の全国8.2万件のスパイクは、SBGによる「第3波」出願である可能性が極めて高い。

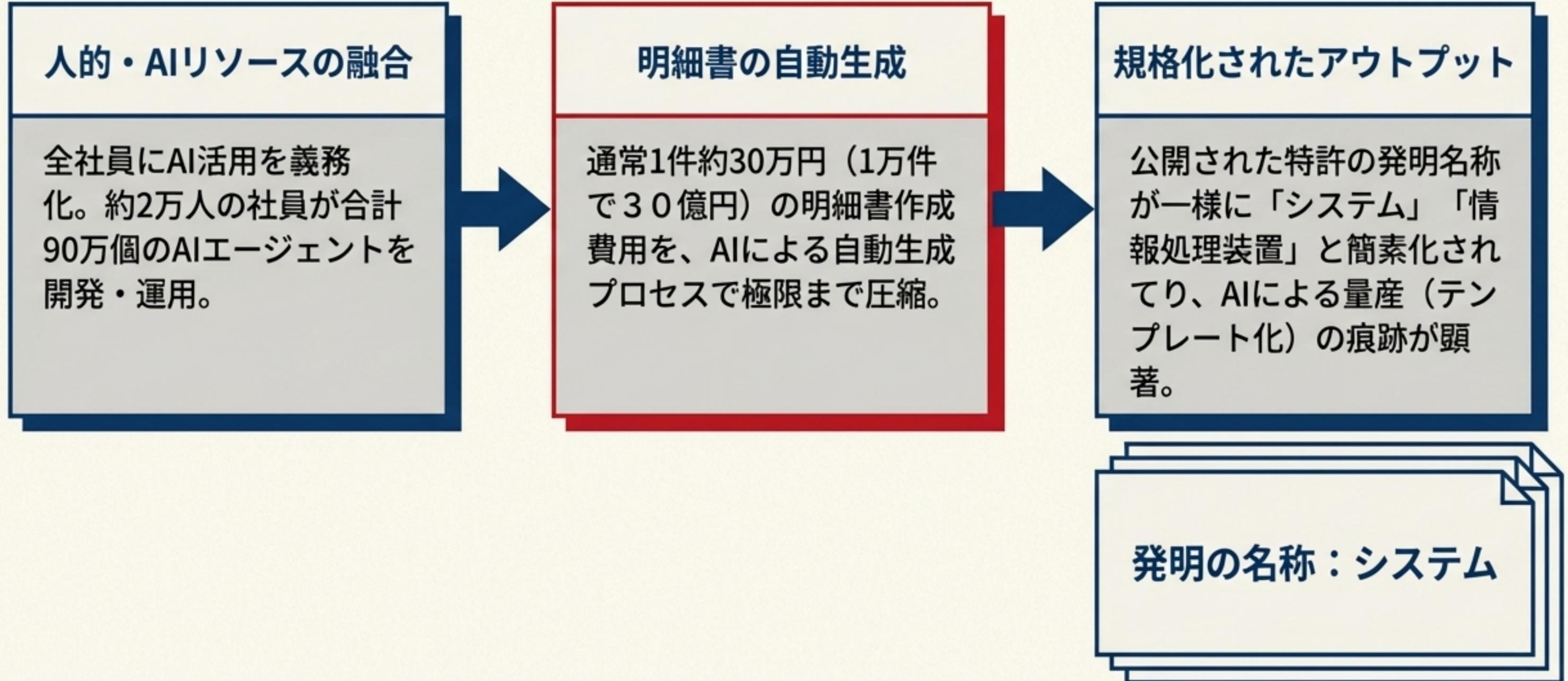
3. パターンの踏襲

第1波(約1万件)、第2波(約1.2万件)という単一月での大規模な組織的動員力が既に証明されている日本企業はSBGのみ。

SBG 特許出願 「3つの波」 全貌マトリクス

フェーズ	時期・規模	現在のステータス	背景・特徴
第1波	2023年9月 (約1万件)	2025年4月 公開済	社内生成AIコンテストを実施し、 10万件のアイデアから選抜
第2波	2024年7-8月 (約1.2万件)	2026年初頭～ 公開中	特許庁が「特定企業による異常 値」として言及
第3波	2025年12月 (推定数万件規模)	2027年中頃 公開予定	全国出願数を前年比2.7倍に歪め る歴史的異常値

The AI Factory : いかにしてコストと手間の壁を越えたのか



ターゲット領域：AI時代のインフラを面で押さえる

G06Q (最大ボリューム)

サービス業向けソフトウェア・クラウドサービス

G16H

医療・ヘルスケアAIアプリケーション

G06N & G06F

機械学習・AIモデル・自然言語処理

Robotics (新領域)

フィジカルAI・自動運転

戦略的フォーカス

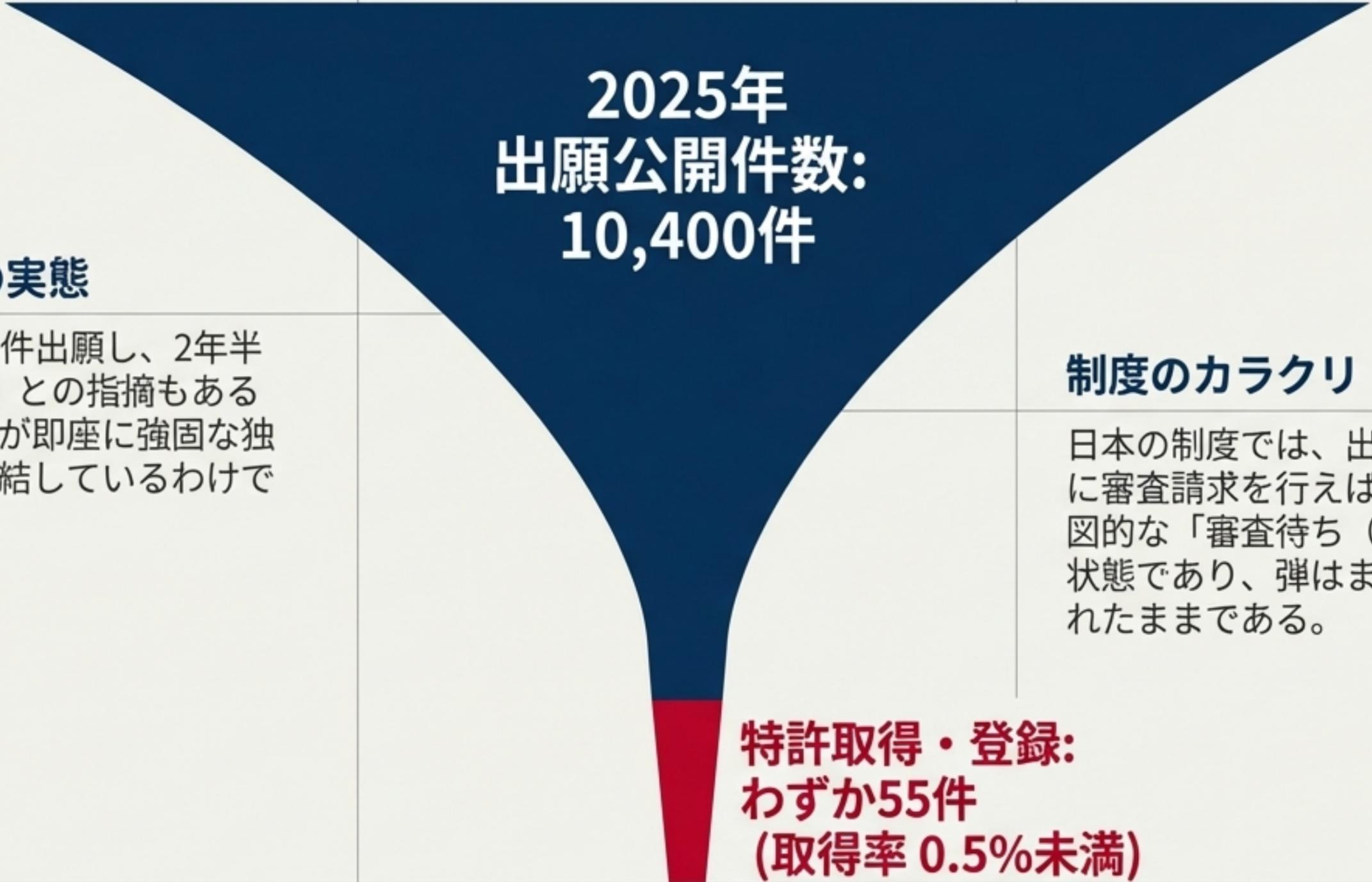
1. ビジネスモデルの根幹への網掛け

G06Qへの集中は、特定の技術要素ではなく、AIを活用したサービス・ビジネスモデル自体を独占する意図を示す。

2. フィジカルAIへの拡大

2025年10月のABBロボティクス事業買収と連動し、データ空間から物理空間 (Robotics) へと知財の包囲網を広げている。

リアリティ・チェック：巨大な入り口と極小の出口



2025年
出願公開件数:
10,400件

低い登録率の実態

「1ヶ月で7,780件出願し、2年半後の登録は3件」との指摘もある通り、大量出願が即座に強固な独占権の取得に直結しているわけではない。

制度のカラクリ（審査請求）

日本の制度では、出願から「3年以内」に審査請求を行えばよい。大半は意図的な「審査待ち（ペンディング）」状態であり、弾はまだ銃身に装填されたままである。

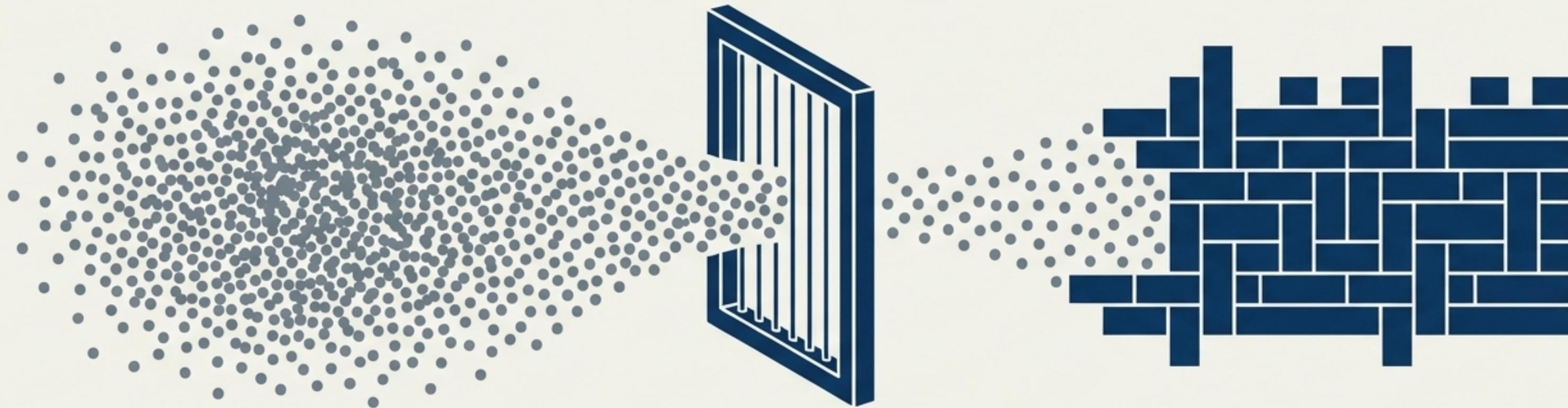
特許取得・登録:
わずか55件
(取得率 0.5%未満)

統合的解釈：SBG「知財の要塞」戦略の正体

網羅的なアイデアの種（量）

3年間の審査猶予期間 / 先行技術化

競争をブロックする強固な城壁（面）



1. 権利範囲の種蒔き

一つ一つの特許の強さ（質）ではなく、AI時代の事業領域に網羅的に「網を張る（量）」ことを優先した圧倒的物量作戦。

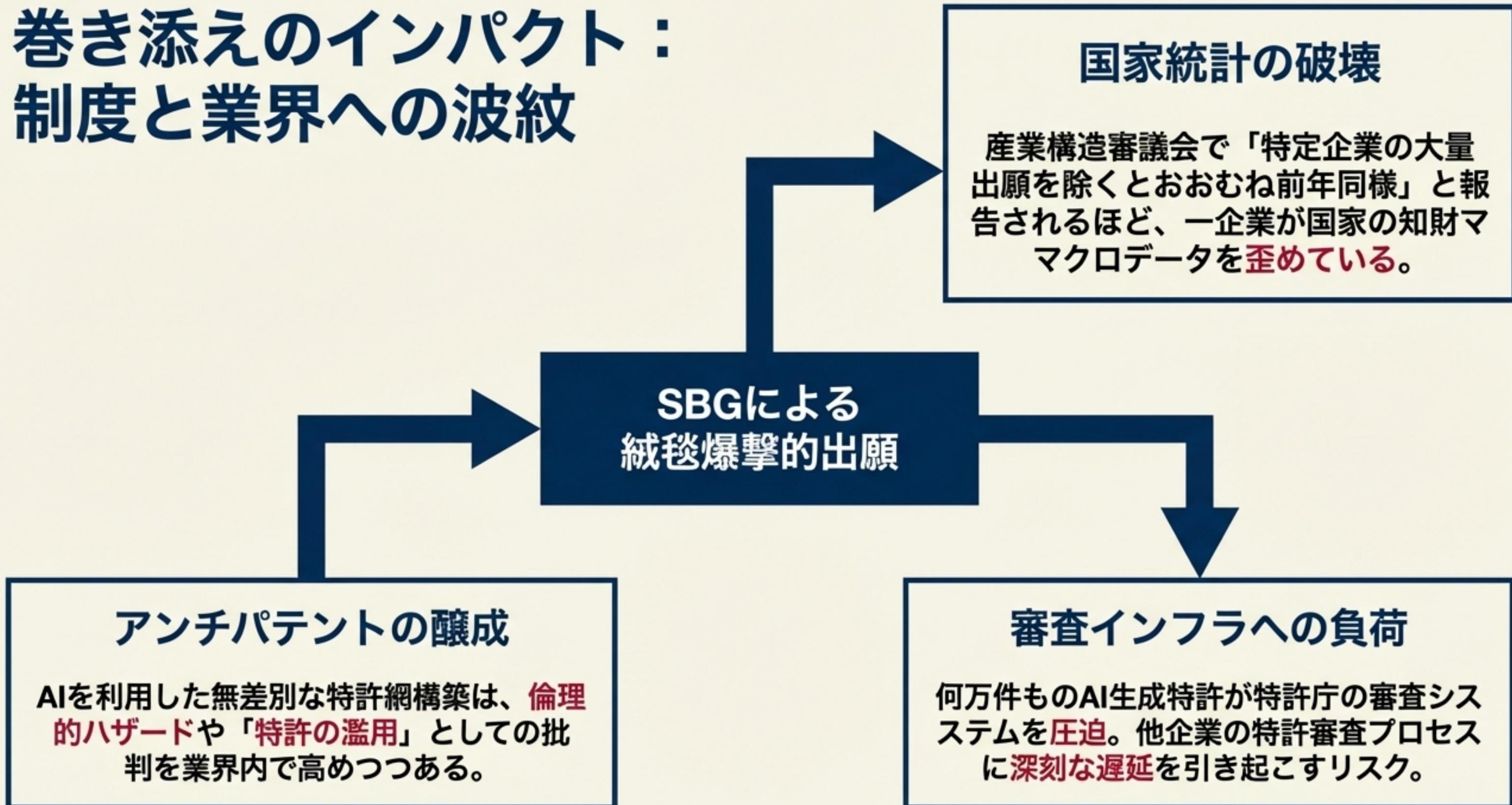
2. 防衛的プレッシャー

権利化されていなくとも、「出願公開」されるだけで他社の特許取得を阻止する「防衛的效果（先行技術化）」が働く。

3. 選択と集中

3年の猶予期間中に、実際に事業価値が高まった技術や他社が踏み込んだ領域のみを狙い撃ちして審査請求する、高度なポートフォリオ構築。

巻き添えのインパクト： 制度と業界への波紋



Future Watchlist : 今後の注目カレンダー

**2026年
4月～12月**

2025年12月出願分（第3波）の一部が先行して公開開始。第3波の具体的な技術領域と、AI生成明細書の質の変化が判明する。

**2027年
上半期**

第3波（出願後18ヶ月）の「大量公開」が本格化。8.2万件の異常値の全貌が、データとして完全に確定するタイミング。

**2026年～
2028年**

第1波・第2波の「審査請求」および「特許査定」の結果が出始める。「要塞」が本物か、単なる張り子か（実際の権利化率）の真価が問われる。

結論：ルール自体を書き換える壮大な実験

ソフトバンクグループによる前代未聞の特許大量出願は、単なる数の暴力ではない。それは「AIによる発明の自動生成」と「制度のタイムラグ」をハックし、来るべき生成AI時代の覇権を握るためのシステムティックな包囲網である。



「絨毯爆撃」のフェーズは完了した。これから2028年に向けて、戦いの舞台は「出願」から「権利化・マネタイズ」へと移行する。これは一企業の戦略にとどまらず、日本の知財制度そのものの耐久性を試す歴史的なストレステストである。